

仙台スポーツリレートーク・レポート

主催 市民スポーツボランティア SV2004

私たちはスポーツボランティアとして幅広いスポーツをサポートしています。そのスポーツに関わるキーとなる方に、現在のスポーツ事情や将来への展望に関して話しを聞くことができれば、私たちの活動はもっと広がり豊かになると考え、ボランティアの栄養補給と夢の実現の場として企画したものが「仙台スポーツリレートーク」です。

第二回 「仙台・宮城のサッカーの今 ~ これからの可能性 2010 ワールドカップ振り返り」

スピーカー 宮城県サッカー協会 理事 竹鼻 純 さん

日時 2010年8月26日(木) 20時~22時

会場 仙台市市民活動サポートセンター 研修室2

参加者 ボランティア関連 13名



2002年、私たちの住む宮城・仙台でワールドカップが開催されました。あれから8年、今年は南アフリカで開催され、日本は2002年以来の決勝リーグ進出を果たしました。今回はそのワールドカップを振り返りながら、宮城のサッカーの今とこれからについて宮城県サッカー協会理事の竹鼻さんにお話しをうかがいました。

.....

立場もありますが毎日サッカーのことを考えない日はありません。頂いたテーマがワールドカップを振り返るということですが、まず結果からいえばスペインが優勝してよかったと思います。優勝国のプレーは世界中のサッカーに影響を与えますが、その意味では最も良いサッカーをしていたのがスペインだったと思うからです。一方で決勝戦は多くのイエローカードが出されましたが準優勝のオランダは暴力的なサッカー(アンチフットボール)をしていてショックを受けました。それも勝つために決勝ではレッドカードは出しにくいと予測しての作戦だったのではないのでしょうか。

スペインはヨーロッパの参加国では最も身長が低いチームでしたが、つなぐサッカーに徹し、フォワードとディフェンスのラインを狭くして高い技術で優勝しました。こうしたプレーに子供達はあこがれると思います。特筆すべきは3位のドイツで、かたい無骨なサッカーが身上でしたが、2000年からユース年代の強化に計画的に取組み、今回は若い世代が中心となりきれいにつなぐという意味ではスベ

イン以上でした。しかし、その分しがついてでもというプレーがなくなり全体に淡白に感じました。その背景にはトルコ系やポーランド系などの移民を受け入れチームを構成したことで、ゲルマン民族特有のよさがなくなり、逆にうまさ生まれたということがあります。

日本は頑張ったと思います。大会直前にやり方を変えましたがそこで修正できるのが日本の良さといえます。直前のメディアによる監督交代の論調については、代わりの人を示すことなく代えろという意見はおかしいと感じていました。昔からサッカーはメディアが批判しやすく、それを受け入れる土壌も良さとしてありました。一方で日本のメディアは選手の批判はあまり書かない(ヨーロッパでは良く批判されます)ということで少々ゆがんでいる気がします。

さて、ワールドカップを視点をかえてみてみましょう。実は各国の代表は民族や宗教などの問題を抱えており、サッカーはサッカー以上のものとなっているのです。例えばヨーロッパでは多くの選手にとっては代表よりもクラブが優先されます。何故ならヨーロッパの人にとって国というものがよりどころにならず歴史的にも常に国境が動くものだったからです。だからこそよりどころは地域であり、そこにあるクラブということなのです。1998年のワールドカップではフランスが優勝しました。当時、フランスは、移民してきた人々と元々のフランス人の間に緊張関係がありましたが、この優勝をきっかけに国としての一体感が出たと言われました。しかし、12年経って今は、又、多くの問題を抱えているようです。

サッカーのナショナルチームは、ほとんどの国が、その国の持つ様々な問題を背負いながら、ワールドカップに参加しています。

優勝したスペインではフランコによる独裁政権が長く続き、バスクやカタルーニャが迫害を受けました。したがって、その地域の人にとってFCバルセロナを応援するという事はカタルーニャを応援することであり、FCバルセロナとリアル・マドリードの対戦は民族の代理戦争だったのです。過去に何度も優勝候補に挙げられながら結果がでなかったのは、こうした背景もあって、スペインチームがまとまったためしかなかったからと言われています。カタルーニャ人は一度もスペイン代表を応援したことがなかったとも言います。

今回はというと、スペイン代表の先発7~8人がバルセロナの選手だったこと。ユース年代の強化を15年ほど続けてきたことで選手たちが子供のころから友人となり、地域間のエゴが出なくなってきました。二年前のヨーロッパ選手権で優勝したスペイン代表は、FCバルセロナの選手を中心に据え、素晴らしいサッカーを展開しました。今回もほとんど同じチームで参加していましたので、もし優勝すれば、個人的にはスペインが歴史上初めて、国として、一体感を持ち、代表チームがその象徴になるのではと関心を持って見ていました。しかし、聞くところによるとカタルーニャではバルセロナの選手が多いので、良かったけど複雑、ということのようで首都マドリードのような大騒ぎにはならなかったようです。

こうしたさまざまな代表の背景にあるもの、サッカーそのものが自分たちの存在証明という相手ですから、日本が勝つということは容易なことではないのです。日本のメディアはなかなかサッカーに特化した専門の人が育たにくい環境にあります。特にスポーツ新聞にその傾向が強いと思いますが、何年かのローテーションで担当する種目が変わるという日本独自の仕組みが災いしていると思います。むしろフリーランスのジャーナリストや一般紙で専門家が育つ傾向があります。社会との関わりの中で、ス

スポーツの背景にあるものをとらえることが出来る、そんなメディアの専門家が生まれて欲しいと思っています。

日本は2018年、2022年のワールドカップ開催地に立候補しています。相手はオーストラリア、韓国、UAE、アメリカなどですが、チャンスがないわけではありませんがオーストラリアがやや有利というところでしょうか。日本決定の場合の開催地ですが、宮城県は県の財政が極めて厳しいということで立候補を断念しました。宮城スタジアムは、経年劣化もあり、改修が不可欠で、多額の財政負担が見込まれます。今の状況で、ワールドカップは、残念ながら難しいと言わざるを得ません。

宮城のサッカーは33万人の署名によりブランメル仙台（現在ベガルタ仙台）を生み、プロサッカーチームを作るという目的は達しました。その背景には「サッカーを知ってほしい」「日本のトップスポーツを継続的に観戦できる」ようにしたい、ということがありましたが、結果として人気はでましたが強くなっていないことが課題となっています。いえ、むしろ弱くなっているという危機感があります。

ボランティア指導者では限界がある中で、育成に専念できる優秀な指導者は、育ちにくいという環境も原因の一つです。今後、「Jリーグは「ホームグロウンプレーヤー」という地元で育った選手を一定の割合でトップチームでプレーさせることがルール化されることも検討されています。

こうした課題を改善するために、サッカー協会とベガルタ仙台が連携して定期的に協議したり、ワーキンググループを立ち上げて指導者の育成に取り組んでいます。そこからチャレンジリーグも始まりまし、勉強会も開催しています。まずは地域を強くし中位をめざすことが目標です。

以下、質疑

スポーツの可能性については今後継続のテーマとすることになりました。

